■日漢協トピックス■

第76回日本東洋医学会学術総会 市民公開講座 開催

2026年6月14日（日）、富山国際会議場（富山市）において、第76回日本東洋医学会学術総会市民公開講座が「くらしを支える漢方―医療・看護・経済の観点から」をテーマに開催された。
本講座は、例年同様、日本東洋医学会と日漢協の共催により実施され、当日は138名の来場者をお迎えし、盛況となった。
まず、会の冒頭、日漢協を代表し、町田 吉夫常務理事より開会の挨拶があった。

【町田 吉夫常務理事】

【案内用チラシ】

【会場の様子】

その後、講演のセッションに移り、司会を古田 一史先生（金沢聖霊総合病院副病院長）が務められ、3名の演者の先生方が登壇された。

各登壇者のご講演の概要は、以下の通りである。

【古田 一史先生】

◆「“医療”と“マクロ経済”はどんな関係があるのか　そして漢方薬が創る明るい未来」

赤瀬 朋秀先生（日本経済大学大学院 教授）

医療を経済原理で捉えることへの抵抗が強かった時代、医療は患者本位で費用を二次的に考える価値観のもと実践されてきた。
しかし近年、国民医療費は増加を続け、令和5年度には約48.9兆円に達し、今後も拡大が予測される。社会保障費は国家財政の大きな割合を占め、医療費適正化が重要課題となっている。医療保険制度を将来にわたり維持するためには、国民と医療従事者が当事者意識を持ち、医療と経済の関係を見直すことが不可欠である。あわせて、漢方薬の活用がもたらす影響や可能性についても検討が求められる。

【赤瀬 朋秀先生】

◆「養生のすすめ　～健康寿命を自分らしく生きるために～」

四日 順子先生（富山大学附属病院看護部 認知症看護認定看護師）

漢方は古代中国から伝来し、日本の風土や体質に合わせて発展した医療体系であり、「養生」や「気血水」などの概念に基づき、心身のバランスを整え自然治癒力を高めることを重視する。こうした考え方は現代の健康観や看護にも通じ、未病の段階からのケアにも有効とされる。
漢方薬は複数の生薬を組み合わせ、個々の状態に応じた処方が可能である一方、副作用や適否に配慮し医師の診断のもとで用いることが重要である。日常に漢方の知恵を取り入れることで、健康寿命の延伸と生活の質の向上が期待される。

【四日 順子先生】

◆「漢方で余裕シャクヤク!?　～漢方の知恵で健やか、しなやかな生活を」

田原 英一先生（福島県立医科大学 会津医療センター 漢方医学講座 教授）

漢方医学では、病気を局所の異常ではなく体全体のバランスの乱れとして捉え、その原因を内因・外因・不内外因に分類する。とりわけ現代では、無理や我慢による心身の緊張が不調の大きな要因となりやすい。こうした緊張に関わる生薬として芍薬があり、筋肉のこわばりや痛み、気持ちの張りをやわらげる働きを持つ。日常では、「食べる・寝る・出す・遊ぶ」などを整えることが重要であり、漢方薬はこうした土台があってこそ力を発揮する。最後に、昨年末のOTC類似薬問題については、漢方は回避できたが、今後再燃の可能性もあることを皆様にもご理解いただきたい。

【田原 英一先生】

各先生方の講演終了後は、司会と演者の先生方によるディスカッションの場が設けられた。今回のテーマである医療・看護・経済の観点より活発な意見交換が交わされ、多岐にわたる情報が共有された。
最後に、本学術総会会頭である貝沼 茂三郎先生（富山大学医学部和漢診療学教授）より、本講座の来場者に対し、参加への謝意が述べられた。

【ディスカッションの様子】

あわせて、現在取り組んでいる「八味地黄丸」の認知機能に関する研究について、ふるさと納税を通じて研究資金を募るプロジェクトへの参加が呼び掛けられた。

【貝沼 茂三郎先生】